

思い出 丸かじり 全8章

- 第1章 アーティスト名「おにくうどんえ」の由来について
- 第2章 小中学校時代の思い出について
- 第3章 藤枝東高校時代の自画像と思い出について
- 第4章 早稲田フォークソングクラブへの入部の模様について
- 第5章 ミュージシャンとしての生活について
- 第6章 一度は離れた音楽活動に復帰した経緯について
- 第7章 有名なミュージシャンとの親交について
- 第8章 現在の活動について

第1章 アーティスト名「おにくうどんえ」の由来について

この名前を発見したのは、今から50年以上も前のことです。西益津小学校1年生の「さんすう」のテストの時間でした。時間が余ったので、ぼーっとして、ふと、テストの紙に目を落としていたときでした。ひらがなで書いた自分の名前「えんどうくにお」に目をやりながら、何気なく逆さに読んだところ、「おにく?」、そのときは、びっくりして、心臓が止まりそうになりました。勇気を出して、もう一度、確かめるように、続きを逆さに読んでみると、「うどんえ?」、両方あわせて、おいしそうな「おにく」と「うどん」、全体で「おにくうどんえ」です。「えんどうくにお」が、「おにくうどんえ」になっているではありませんか。小学校1年生の私の驚きが皆さんにもお分かりかと思います。そのことを近くの席の友だちに言ったら、大うけでした。その日のうちに、あっという間に、僕の「あだな」になってしまいました。

余談ですが、その友だちと張り合うために、名前を、逆さに読んでみたところ、何と、「じすまらむし」となり、休み時間の廊下などで、お互いに、「おにくうどんえ」「じすまらむし」と言い合ったりしました。しかしながら、やさしく響く「おにくうどんえ」は、闇の国の使者の呪文のような、「じすまらむし」の魔術的な響きには、とうてい、かないませんでした。「じすまらむし」は、後に大校長になった「志村益司」先生です。

第2章 小中学校時代の思い出について

学校では、何をやるにもマイペースの中心選手という感じでした。友達の皆さんには、良かれ悪しかれ、いろいろとご迷惑をおかけしたと思います。反抗期の中学校時代は、気に入らない先生に対しては、徹底して反抗しました。仲間の思いを代弁して主張するなど、先生にとっては扱いにくい生徒だったと思います。3年生のときには、とうとう学級を追放され

て、隣のクラスへ3週間ほど「内地留学」をして、楽しく過ごし、再び、自分の意志で学級へ戻ってきたことがありました。その先生とは、のちに、同じ学校の同じ学年の隣同士の学級担任になったことがありました。本当に、人生、先はわからないものですね。

あるとき、音楽の先生に合唱部へ誘われたのですが、断固拒否しました。先生に理由を聞かれて、つい、「あんな女の腐ったのなんてやりたくない！」と大声で言ってしまい、ひんしゆくを買いました。音楽のペーパーテストは、学級の男子のなかでは最高点、歌も学級では一番うまいと自負していたし、ハーモニカやリコーダーなどの楽器も上手でしたが、どういふわけか、音楽の成績だけは悪かったですね。

また、東京オリンピックが開催されたときのことだったでしょうか、マラソンかサッカーの試合をテレビで見るために、学校から黙って帰宅してしまうようなこともありました。今は懐かしい思い出です。

先生とのコミュニケーションはうまくいきませんでした。私には優しいところがあったので、同級生の女子の間では人気がありました。悩みごとの相談を持ちかけてくる女子もいたりして、ちょっとした「人生相談」役を引き受けていました。

第3章 藤枝東高校時代の自画像と思い出について

私の通った西益津中学校は、第1回全国中学校サッカー大会の優勝校で、藤枝市のなかでもサッカーが強く、いつも藤枝中学校と覇権を争う関係でしたが、のちに日本リーグに入るような、とてもかなわない人たちがいました。体育は、グラウンドを何十周も回るような恐ろしい授業だったので、高校での体育はレクレーションみたいでした。特にサッカーでは、サッカーが盛んな中学校から入学したので、他の人よりもうまかったと思います。自分なりの高い技術の個人技で相手を抜いたり、シュートを打ったりして、こんなおもしろいものはないと熱中しました。

スポーツは好きでしたが、それでも、自分よりも遥かに上手で体力のある選手がたくさんいましたから、サッカーなどの応援をしながら、気楽に過ごしましたね。受験勉強もそれなりにしましたが、サッカーを自由に楽しんだ平和な時代でした。

ところで、藤枝東高校のグラウンドといえば、静岡国体で天皇陛下をお迎えするために作った、コンクリートのスタンドを覚えていないという人は、まさか、一人もいないと思いますが、私だけの懐かしい思い出があります。まだ、私は中学生でしたが、指導教室が開かれたのでしょうか、スカウトのためでしょうか、近代日本サッカーの恩人である、あの「デトマー・クラマー」さんが藤枝東高へ来校したことがあり、私も見に行きました。スタンド

に立って、私の前で練習を見ていた小柄なクラマーさんが、何気なく後ろへ少し下がった際に、背の高い私の足を踏んで思わず振り返り、見上げて、きっとドイツ語だったのでしょうが、一言二言謝ってくれたことがありました。不思議なことに、もっとも、若い青少年にしてみれば当然だったかもしれませんが、何かとともうれしくなって、いつまでも心の底に残って記念と誇りとなり、ますます、クラマーさんのファンになったことを覚えています。

数年前でしょうか、ヨーロッパの自宅で過ごす老年のクラマーさんを紹介するテレビ番組が放映されましたが、その画面をみながら、ああ、この人が、あの藤枝東のスタンドで、うれしいことに、この僕の足を踏んでくれて、謝ってくれたっけなあと、懐かしく思いました。いまでも人に自慢したい、私だけの、宝石よりも遥かに貴重な、青少年時代の思い出です。

第4章 早稲田フォークソングクラブ (WFS) への入部の模様について

私が早稲田大学商学部に入學した当時は、学生運動の真っ只中で、授業などは殆んど行われませんでした。何をやったらいいのか迷いながら、英会話部に入ることにしましたが、私には余りおもしろくはありませんでした。

そんな大学一年の6月、大隈講堂で開かれた早稲田フォークソングクラブ (WFS) のコンサートを聴いたのがきっかけで、これは「おもしろそうだ!」と思いました。当時はカレッジフォークが最盛期で、「ザ・リガニーズ」、「シュリークス」そして、「ジ・アマリーズ」が、人気の3大グループでした。語呂合わせのようなネーミングがこの頃はやっていましたが、ザリガニが名前の由来である「ザ・リガニーズ」は、1968年に「海は恋してる」でデビューし、元メンバーに、のちにテレビ局のレポーターで有名になる「所太郎」さんを含む、すでに有名なグループでした。金切り声が由来の「シュリークス」は、リーダーだった「神部和夫」さんが、「所太郎」さんと明治大学の「山田パンダ」さんとで結成したグループです。そして、字余りが名前の由来である「ジ・アマリーズ」は、「陣山俊一」さんに、「田口清」さんと「坪野隆」さんが加わり誕生したグループです。

早稲田大学は、猛者と言いましょうか、一番うまい連中が集まる場所でした。魅せられて、「このくらいなら自分でもできるかな」といった程度の気持ちで入部しましたが、想像すれば誰でもわかることですが、私のような、ギターも弾けない学生が普通に入部するはずもないところでは。夏の合宿に参加したのですが、「今度、入部してきた背の高い奴は、ギターが全く弾けないんだって!？」と有名になりました。しかしながら、私には、歌えるという強味と信じがたい度胸というものがあつたのです。一生懸命に練習して、またたく間に上達して、周囲のレベルに追いついて、その後の活動を続けました。

第5章 ミュージシャンとしての生活について

大学生のころは、皆さんご存知のところでは、リンゴとはちみつで有名な「ハウスパーモンドカレー」やサントリーの「ビバ純生」のコマーシャルなどに、裏方のハモリで出演していました。デパートでの会社キャンペーンなどにも参加していました。

大学3年生の時に、それまでの活動が認められ、実力のある上級生たちと「ピンクパンサー」というバンドを結成しました。コンサートに出演した時に、その会場にいたコロンビアレコードのディレクターに声を掛けられ、レコードデビューが決まりました。2年間の専属契約ということで、LPとEPレコードを会社負担で発売するという結構な話でした。コロンビアのスタジオを借りて、レコーディングしたことは、いい経験になりました。プロダクションに所属し、マネージャーが付き、レコードを発売して、各放送局のオーディションも受けました。NHKを始めとして、ほとんどの局のオーディションに合格しました。

関西地方に2日間のキャンペーンに出かけた時、新大阪駅まで自家用車で迎えに来てくれた運転手さんがとても親切で、いろいろな放送局への挨拶回りに連れて行ってくれました。その後、彼は、とても有名になりました。彼とは、あの「アリス」の「谷村新司」さんです。

しかしながら、それぞれに自分の音楽性というものがありますので、私は、結局のところ、卒業前には引退してしまいました。

第6章 一度は離れた音楽活動に復帰した経緯について

大学時代の一年先輩には、「ジ・アマリーズ」のボーカルで、のちに、「雪」「地下鉄に乗って」などの曲で知られるグループ「猫」のボーカルになった「田口清」さんがいました。「田口清」とは互いのギターを交換していたので、私の元には、彼のギターがありました。1990年代の初めに、彼は、自宅近くの公園で、自転車に乗っていて転倒したのでしょうか、42歳の若さでなくなりました。結果的に、私の元には、まるで、あらかじめ預かった形見のように、「田口清」さんのギターが残りました。私の心に強く感じるものがあったので、今も、はっきりと覚えています。彼が「アマリーズ」で歌っていた曲を、ギターを持って20年ぶりに歌ったのです。そして、青島中学校から藤枝中学校へ異動した頃には、私が歌を歌う人物であることがだんだんと知られてきて、生徒会の子どもたちから「福祉の集い」で20分ほど歌ってくれないかという要請がありました。子どもたちの声、思いや願いには、最大限、耳を傾けてきた私でしたので、引き受けることにしました。

その頃、学校では、男子にはそのようなことはなかったのですが、女子の間では、夏服の第一ボタンを、3年生は外していたのですが、1・2年生は、暑いから外しなさいと勧めて

も、決して外さない伝統や雰囲気がありました。そこで私は、人のためを考える「福祉」もいいけれども、そんなことを考えている場合か、人を支えていくために、まず、もっと自分たちの足元の、いや、胸元の問題に目を見開いていくことが重要で必要なことではないのかというメッセージを込めて、「胸のボタン」というオリジナル曲を歌ったのです。これが、自分にはそれほどではなかったのですが、思いのほか、生徒たちに受けて、大変に喜んでくれました。

その後、50歳で教頭になって赴任した中学校でも、長い間忘れていた音楽活動がさらによみがえってきて、オリジナル曲「とうとう教頭」が出来上がっていったのです。子どもの前で歌い、PTAや地域でミニコンサートなどを開き、その触れあいをおしながら、認められていったのです。

親しんだ学校にも別れを告げて、自然と人情が豊かな地域の岡部中学校へと赴任することになりました。平穏な地域と安定した学校では、ゆったりと時間が流れました。この地域は、私の父の出身地で、とりわけ愛着が湧き、地域に根ざした私なりのオリジナルな歌が生まれました。若い頃からの知り合いで、皆さんもご存知の、「山本コータロー」さん、「イルカ」さんや「伊勢正三（正やん）」さんを招いてコンサートを開いたりしました。

この頃から、「歌う教頭」として、新聞、テレビなどで注目され、コンサートの様子などがニュースで流れるようになりました。4年目の年に、「俺は歌う教頭」と題して、静岡放送（SBS）が、自主制作番組として、50分のドキュメンタリー番組を企画し、放映されました。一般的には、学校に新聞社や放送局が入ることは、なかなかないことで、子どもたちのプライバシーへの配慮などもあって、避ける傾向にもあると思いますが、このときは、教育長さんの勧めや応援もあって、テレビ局スタッフが学校に入って、実に6カ月、半年にわたる長期の取材でした。

第7章 有名なミュージシャンたちとの親交について

当時、知り合ったミュージシャンで、現在も活躍して、皆さんもよくご存知の方々は、「イルカ」さん、「かぐや姫」、「風」、「山本コータロー」さん、「猫」、「吉田拓郎」さんなどではないでしょうか。

特に、「イルカ」さんと「山田パンダ」さんとは、私が大学1年生の頃からの知り合いでした。「WFS」に入部した時の幹事長は、「シュリークス」の「神部和夫」さんで、私のことを大変に可愛がってくれて、自分たちが出演するコンサートに、よく連れて行ってくれました。その時に一緒にいたのが、当時、女子美術大学の「イルカ」さんで、のちに、「神部和夫」さんと結婚しました。

当時、早稲田大学法学部に所属していた「後藤由多加」さんが卒業して、「ユイ音楽工房」を設立しました。フォークはイベントなどに活動の場を持っていましたが、業界からはまだ距離があった時代です。「後藤由多加」さんと「吉田拓郎」さんはパートナーとなって、本格的な活動を繰り広げ、その後のフォーク界を大きく発展させました。

この「ユイ音楽工房」には、はじめ数人のスタッフがいましたが、実は、そのうちの一人が、のちに私と結婚する今の女房で、大学では「イルカ」さんの1年後輩でした。それぞれが、その頃からの知り合いで、今でも、交流が続いています。1975年秋、10月10日の、私たちの結婚式には、「イルカ」さん、「山本コータロー」さんや「かぐや姫」の皆さんなど、世に知れたミュージシャンたちが列席し、祝福してくれました。

明治大学の「山田パンダ」さんは、WFSの準会員で、「シュリークス」のメンバーとして、早稲田大学へ毎日練習にきていましたので、私にとっては、大学の先輩ということになります。いずれにしても、「イルカ」さんや「山田パンダ」さんが有名になるのは、それから4年ぐらいが経ってからとなります。

アイドルの「天地真理」さんとは、デビューする直前まで、「ピンクパンサー」のバンドマスターの「所太郎」さんにギターの伴奏をしてもらい、歌の指導を受けていましたので、よく一緒にお茶を飲んだり、馬鹿話をしたものでした。「真理」ちゃんから、「今度、テレビにでるの!」と言われた時も、私は、「あっ、そう!」と全く相手にしていませんでした。当時、私のアパートには、そもそもテレビがありませんでしたので、人気が出て、有名になっていることを、しばらくの間、知りませんでした。「WFS」の友人に言われて、テレビを見たら「マチャアキ」と屋根の上で歌っていました。あっという間に「白雪姫」になってしまい、大いに驚きました。

私は、昔の仲間のコンサートを聴きに出かけると、よく楽屋を訪れますが、それはファンとして会いに行くというよりも、昔一緒に活動した古い仲間たちを激励に行くところでしょうか。「きょうは声がよく出ていたなあ」とか、「あの部分はどうなんだろう」とか、長い交遊をいっそう深め、互いを励ますよい機会になっています。

第8章 現在の活動について

思えば、本川根中学校から始まって葉梨中学校で退職するまでの28年間、志太地区に深く根を下ろした教師生活でした。

その教職を去ってから2年が経ち、CDデビューを果たしました。その他には、ミュージシャンとして果たすべきといたしましうか、自分自身の位置を明らかにするために、必ず、

自分が企画するコンサートを年一回、自分に課しています。去年は、「焼津市文化センター」を会場に、今年3月17日に、藤枝市の「藤の瀬会館」を会場にコンサートを開きました。毎月、地域のイベントに呼ばれています。「静岡CD」をリリースしたり、バイオリンとピアノによる日本のクラシックデュオの「杉ちゃん&鉄平」のプロデュースで「ちゃっきり節」を演奏するなど、5回ほど共演しました。ラジオでは、静岡放送（SBS）などにも出演しております。

そうした活動の他には、月に5～8回ほど、デイサービスなどの福祉施設を訪問し、ギター伴奏で、童謡、唱歌や思い出の歌謡曲などを演奏し、利用者の皆さんと一緒に歌っています。絵本の挿入歌としてオリジナル曲「賀姫（いわいひめ）と大蛇の竜太郎」なども作りましたが、福祉施設などの演奏の前には、童謡や唱歌を研究し、歌詞の1番だけではなく、2番や3番をよく読み込みます。すると、1番だけでは見えなかったその時代の背景や人の生き方などが透かし見えてくることもあり、それだけでも勉強になります。

生き生きした年配者にも出会いますし、涙を流して喜んでくれる方もいます。演奏会の後で余韻にひたる方もいます。手をあわせているので、よく見てみると、ありがたいと拝んでいる方もいます。

とにかく、声を掛けていただければ、どこへでも出掛けて行って、演奏しています。私は、体力と気力の続く限り、歌い続けます。